

眼下に益子の里が広がる丘の頂上にキンタさんの自宅と、  
そのすぐ下に仕事場がつくられた。(p.60)

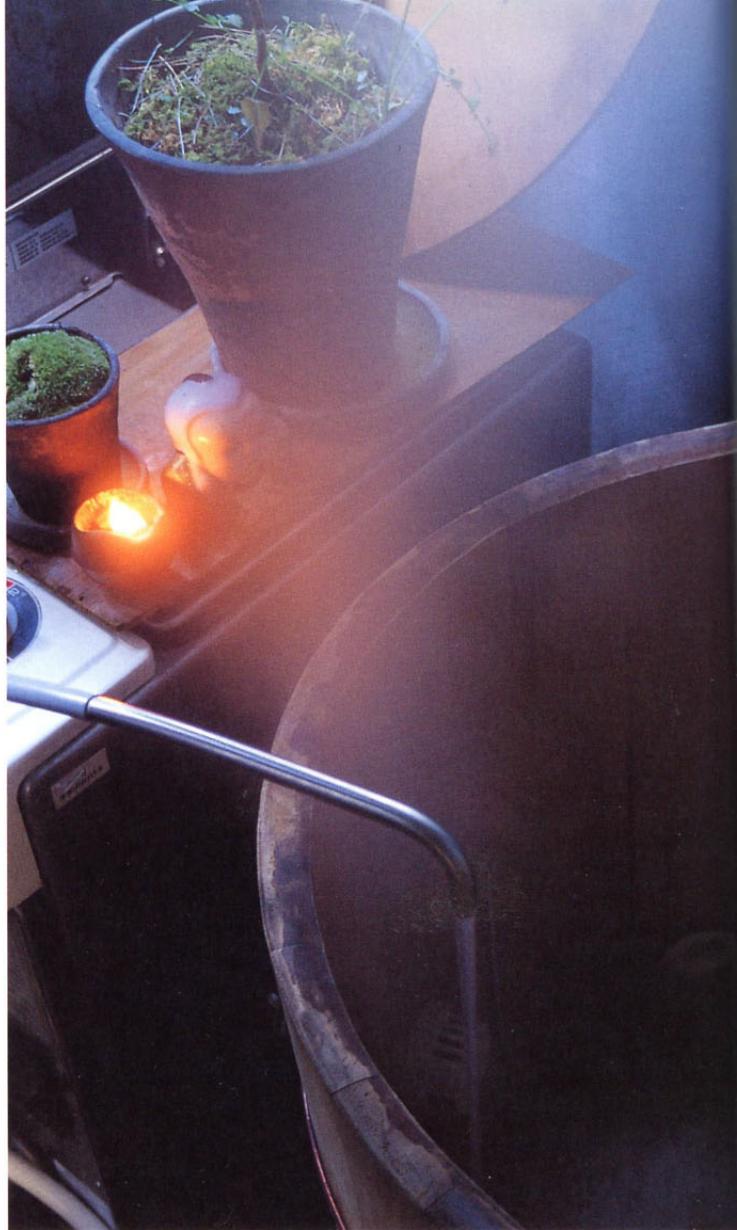
浄化と再生の  
風呂

## 等身大の居心地 つくり手たちによるセルフビルトの風呂場

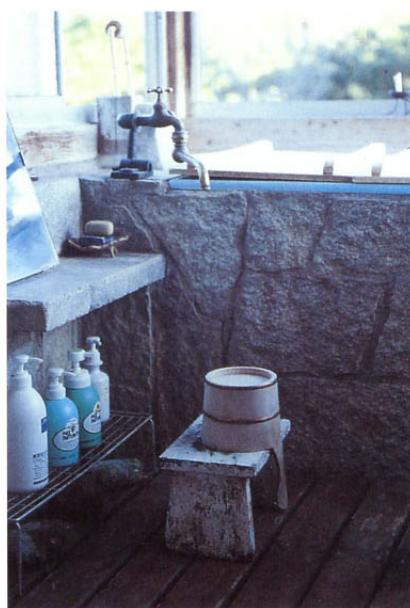
取材・文 堀口博子 撮影 池内功和

栃木県益子町。

陶芸の里としてつとに有名なこの地には、  
つくり手たちをひきつける空気がある。  
それは、のどかな里の風景に巧みに隠されている  
大地を強烈に意識させる地脈だと思った。  
山々のなだらかな起伏に沿って耕された棚田が、  
陽を浴びて美しい生命の交響を奏でる。  
そんな一幅の景色の中で湯煙を上げる喜びは、  
言葉では言い尽くせないものがあるだろう。  
ここに、自然に寄り添って生きる方法を選んだ  
人々の、生活の場がある。  
彼らはセルフビルダーであり、  
自分の居場所を自らの手でつくることを、  
当然の営みと考えている。  
もちろん風呂も然りである。  
彼らのつくる風呂場は手づくりゆえの大らかさで、  
滲みるような味わいを醸している。



星さんの黒い浴室は、立ち昇る湯気をくっきりと映し出す。(p.62)



仲間とつくったキンタさんの風呂、  
5年を経てますます愛着がわいてきたようだ。(p.60)



那珂川のおだやかな流れはダグラスさんにとって  
かけがえのない日本の風景だ。(p.64)



ダグラスさんは雑木林の中に家族のための風呂場を建てた。(p.64)



右／「意味の裏側をつくれる人」  
昨年からコラボレーションを始めたスター・ネットの馬場さんは  
キンタさんのものづくりの感覚をそう表現する。  
左／仕事場を共有する陶芸家の石川若彦さんとともに  
作品を展示しているギャラリーはコンテナを改造したもの。  
枕木を立ち上がりに並べ、どこかブエプロスタイル。  
作品はキンタさんの鉄の狛犬。



下2点/最近改装したスターネット(p.63)のカフェ。  
窓からは須田ヶ池の桜を間近に臨むことができ、  
より外へと開かれた空間となった。

カフテーブルは、酒蔵から譲り受けた舟の板を馬場さんのアイデアを基にキンタさんが製作した。酒をたっぷりと吸い込んだヒバ材やケヤキ材のまろやかでどっしりとした量感とは対照的に、金色の細紐で束ねられた脚と頭の彫刻が差し込む。

風呂桶の回りに石を積んだ風呂場は三方全開。山並みを眺めながら浸かる湯の気持ちよさ。

益子町金田茂夫

鉄と土と木を素材に自在な表現活動を続け

かんだ  
ているアーティスト、金田茂夫さん、通称キ  
ンタさんの風呂は圧巻だ。益子の里を見渡せ  
る丘のてっぺんにある自宅の風呂場は、母屋  
に接する一面を除いて三方全開。百八十度  
の絶景を我がものにできる最高のロケーショ  
ンだ。

ンにある。さらに天窓を設け、夜空を見上げる楽しみも忘れていない。

建物を住まいとして改造したのが八年前、外置きの五右衛門風呂が、当時の風呂だつた。

そして廃棄物の浴槽を手に入れたのをきっかけに浴室を増築した。「広くて明るい風呂にしたかった」ので、母屋から前庭へ突き出す意表をつく格好で、風呂場の位置はラフに計画された。「この辺がいいね」という具合だ。

まずコンクリートで土間を打ち、風呂桶を置き、それを取り囲むように石が積まれ、柱

が立つたのは何とその後だつた。

が立ったのは何とその後だった。  
「大工さんなら風呂桶は最後に置くんだろう  
けど、僕はせつかちだから最初に風呂からぬ  
めてしまうんですよ」(笑)

仕事の合間をみての作業だったので二週間を要したが、仲間たちとワイワイやりながらつくつた風呂には其処彼処に思い出話がある。総予算は十五万円ほど。煙突とアルミナッキン、木材を購入へ、谷曹をどう立派なれる。

白御影は石屋さんに譲つてもらった。灯油バーナーや屋根材などはすべて拾い物、もらいたい物。人の手にすっかり馴染んだ古道具で再編成したキンタ流の風呂には、不揃いなものたちの哀愁が漂い、心なごませてくれる。

「最初に素材ありき。素材がもつているものを考えると自分の見てなかつたものが見えてくるのです。形を最初に描いて『まうと決

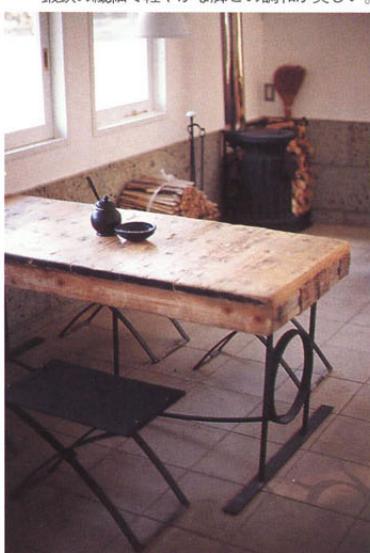
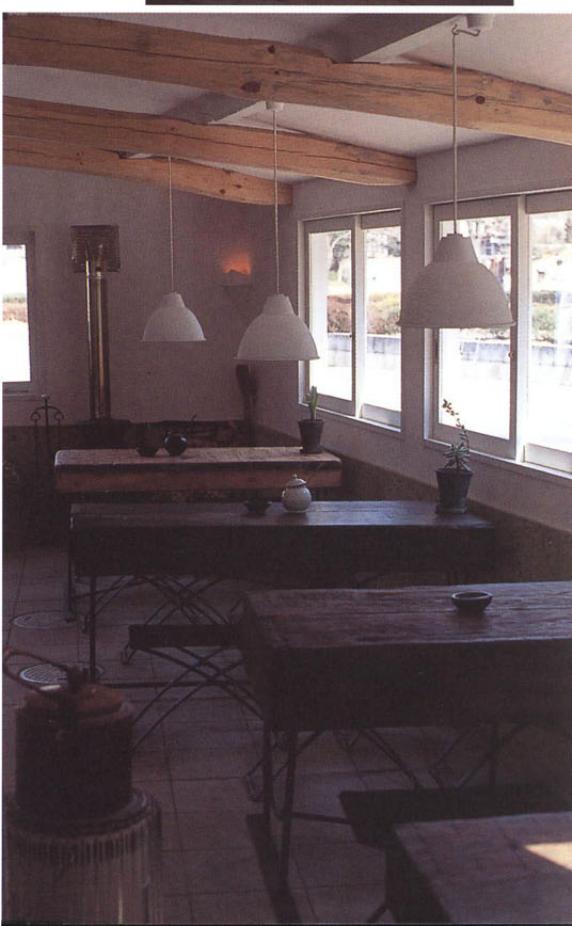
なる。狭い世界にいると技術を使いたくなつて、形を最初に描いてしまふ。猿の

てつまらなくなる

キンタさんのものづくりへの軽やかな信念は、「何事も等身大」を大切にすることでした。日常にも反映されている。キンタさんにとっての風呂は、仕事で土まみれ、埃まみれ、油まみれになつた体をさっぱり洗い流し、夜の思考の時間へとシフトするためのひとときだと言う。満月の夜には窓を開け放し、酒を持ち入れての風呂風呂を味わう。

「僕は毎日風呂に入るような奴じやなかつた  
んだけど、この風呂井戸ができてすっかり風呂好  
きになりました」薪で焚く五右衛門風呂の大  
変さを知つてゐるからこそ、たつた二十分で  
沸く灯油風呂の有り難さが分つたのだと言う。

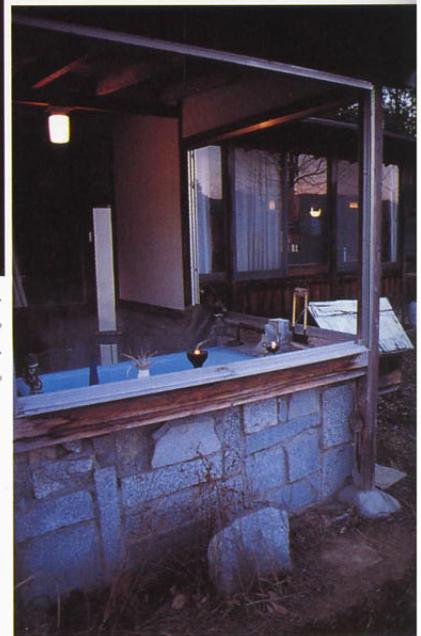
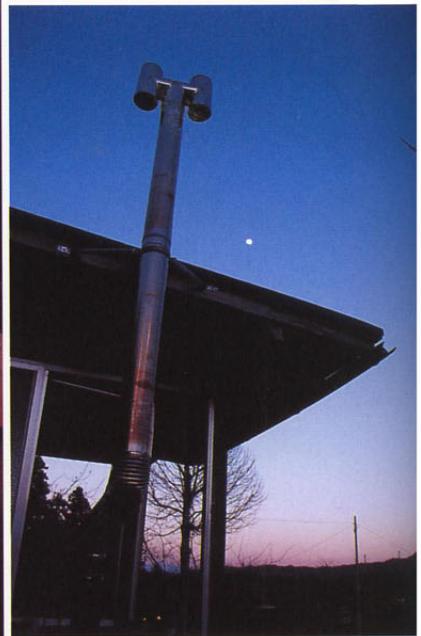
風呂場の前の柵の木が、もう間もなく新芽を吹く季節を迎える。風呂の窓から青々と繁る木の姿を眺めるのも、キンタさんにとっても

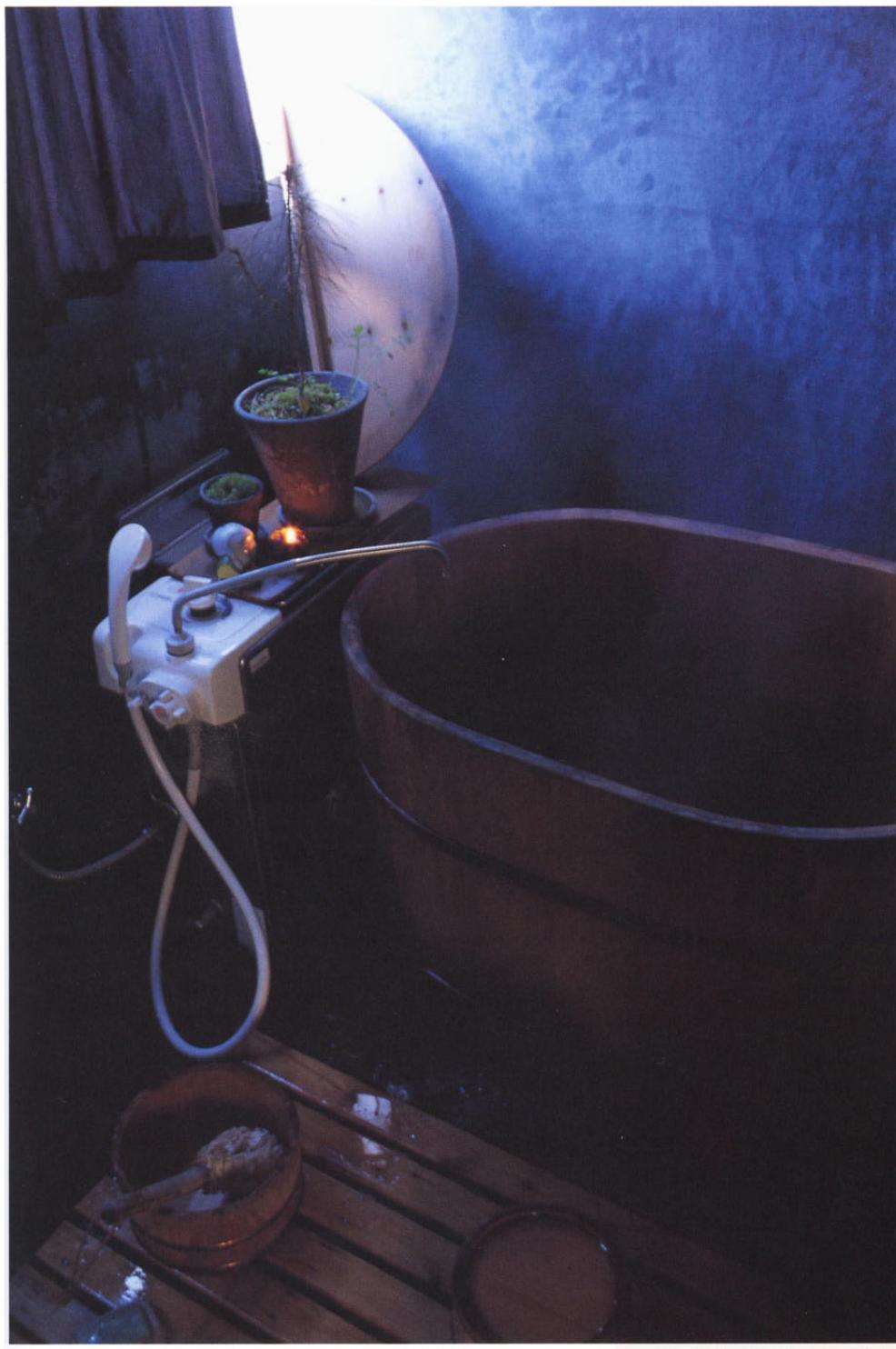




上/暮れなずむ里の夕暮れに、  
三方全開で周囲の自然と溶け込む爽快さ。  
人目をはばからないオープンな風呂場から、  
手づくりならではの格別な居心地が伝わってくる。

上/空に向かってのびる煙突が愛嬌たっぷりに煙をあげる。仕事を終え、ひと風呂浴びる幸福の時。  
下/「重いので手に取った順から積んでいった」  
白御影の、成り行きでできたでこぼこ面白い。  
パートナーで染色家の美雪さんにとって、  
外からも使えるこの浴槽は染め上った布を  
水洗いするのに格好の水場となるそうだ。

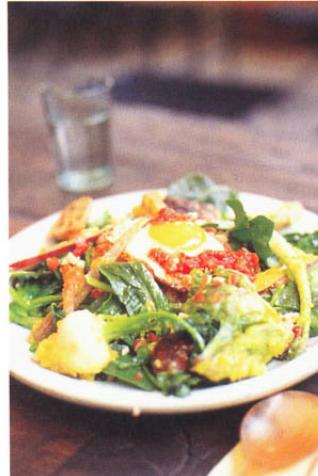




左/少しきめを特注したというサワラ材の風呂桶が  
黒い浴室の中で不思議な気配をつくる。  
木の風呂は手入れが大変と言われるが、  
「お湯を入れる前にさっとブラシで浴槽を洗うだけ」と星さんは言う。



上/スターネットの食は、  
星さんと素材とのコラボレーション。  
益子の野菜、豆腐、玉子、地粉、肉類。  
生産者は、自分で育てた素材が星さんの手によって  
思いもかけない料理となって出された時、  
もっといいものを育てよう、  
今度はこんなものを育ててみたい、  
いろいろな発想が湧いてくるのだそうだ。  
左/「鶏そぼろご飯」は、馬場さんおすすめの一品。  
たっぷりの野菜とともにいただく鶏そぼろご飯は、  
お腹にもやさしい味わいだった。



#### STARNET GALLERY & CAFE

益子を訪れるたびにスターネットでカフェオレを飲みたくなる。ヨーロッパの馬小屋がイメージにあったという建物へと足を踏み入れると、そこには生きる場のデザインの美しさと心地よさがある。東京から益子へ表現の場を移して早2年、この地にスターネットを起ち上げた馬場告史さんは、地元との親密な関わりを〈ものづくり〉の何よりの素材としながら、衣食住にわたるさまざまな提案を益子から発信している。

栃木県芳賀郡益子町大字益子3278-1 tel.0285(72)2270  
12:00~20:00 金曜定休

「土に近い生活」から生まれるものづくりを

実現するため、星恵美子さんは東京から益子へと移住した。今から二年前のことだ。ス

ターネットギャラリー＆カフェをつくった馬場浩史さんとともに、スターネットをゼロからスタートさせた。地元の有機食材を使つたスターネットの料理は、星さんならではの素材とのコラボレーション。同じメニューでも、その日に集まる材料次第、シェフの気分次第で閃くアイデアには、いつも驚かされる。

そんな星さんの住む家は、スターネットを建築する際、大工さんらに用意したプレハブの簡易宿泊施設を自分たちの手でカスタマイズしたものだった。壁に断熱材を入れ、床下

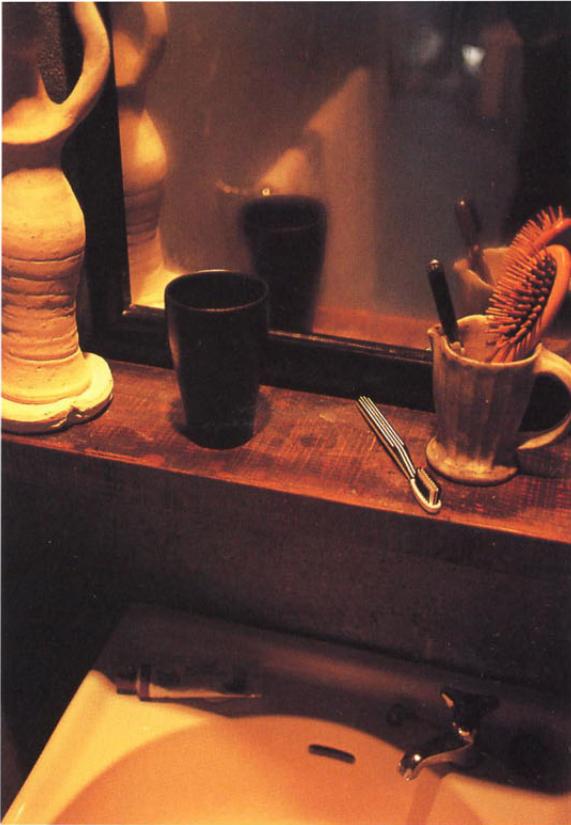
には竹炭を敷き詰め、玄関に蔵の分厚い木戸をはめ込んだ。それはプレハブのイメージを一瞬にして吹き飛ばしてしまうほど痛快で、快適な住まいだ。

その星家で、かねてより風呂の存在が気になっていた。黒の浴室とは、後にも先にも星星宅以外に知らない。風呂の発案者は、やはり馬場さんであった。馬場さんはスターネットの内装や外装でも黒の表情を巧みに演出しているが、そうした発想の最初の試みが星

の風呂桶だけがあつて、ゆらゆら湯気が立ち込めていた。すべてが吸い込まれてしまうようないい生き続けている。星さんの風呂桶も特注品で、馬場さんの埼玉の実家近くの七十歳になる職人に依頼した。意外に手頃な価格で一式九万円ほど。「木の風呂は腐るから面倒がられるけど、八年ぐらい経つたら太陽に干して締め直せば長く使えるものなんです。何より木の香は換えがたい」と馬場さんは話す。

星さんは、出来上がった風呂に黒い防水ペイントを取り付けた。黒い浴室は黒い布によつてさらに謎めいた氣配をつくる。蠟燭を灯し、柚子湯やよもぎ湯など益子で採れる季節の薬湯を楽しむそ�うだ。

暗闇の中で嗅覚が拡張される快感とはどんなものだろうか。家人いわく、「思わぬ考えが浮かぶ部屋」。黒い浴室とは異次元へのトリップを誘う侵入口かもしれない。



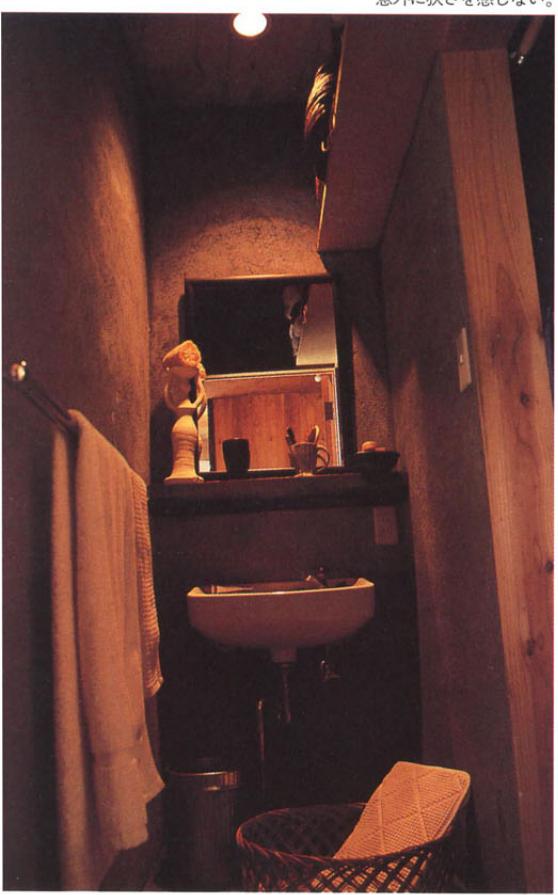
右/無駄がなく、必要なものだけを機能的にアレンジした星さんの暮らしぶりは、どこかシェーカースタイルを思わせる。でも決して禁欲的ではなく、ラヴリーでポップな遊びのしつらえがあたたかい。

下/洗面所の壁にはモルタル+松煙に藁を加えてテクスチャーを変えてみた。

人ひとり左右ぎりぎりのスペースだが、

黒の中に立つと距離感が消えて、

意外に狭さを感じない。

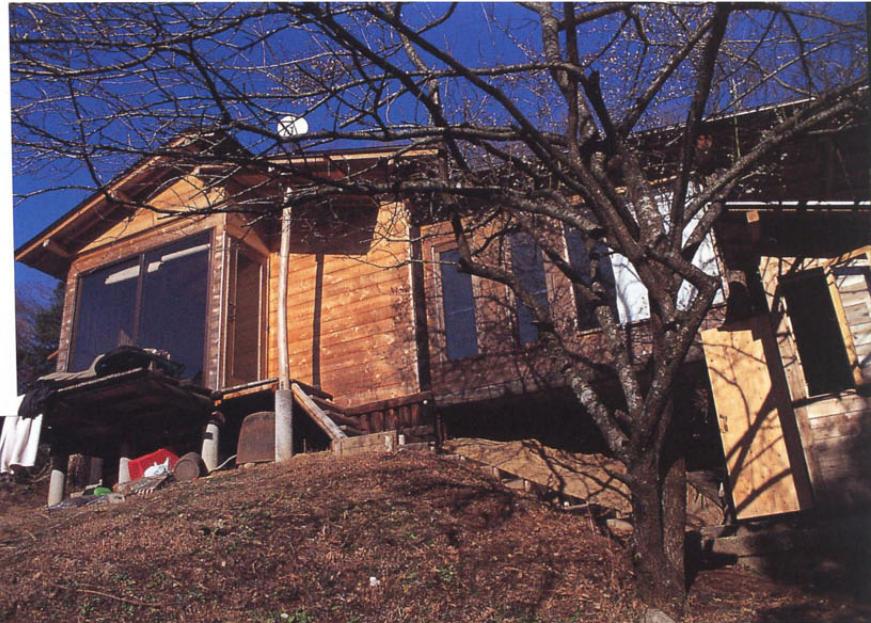


## プレハブの現場小屋を全面的に改装。 黒い壁に囲まれた暗闇に湯気が浮かび上がる。

益子町 星 恵美子

右/子供の頃から住宅建設に携わる父親を手伝っていたので、木を扱うことには慣れていた。工事には苦労もあったけれど、本を買い、独学でようやくここまでつくり上げた。左/母屋から風呂場までの階段は屋外にある。

「風呂から出て、空を眺めつつ母屋に戻るのは気持ちがいい」と、ダグラスさん。



## 那珂川の河原の石をひとつずつ埋め込み、水の音や木々の気配と一緒にとなる。

茂木町ダグラス・ブラック

右/流木を利用した  
「湯の小屋」の取っ手。  
下/風呂場づくりでいちばん時間  
がかかったのが、この石の床。  
どの石をどこにどう並べるか、  
「1日で終わると思ったのに、  
3日もかかってしまった」そうだ。





ダグラス・プラックさんは、野の風呂をついた。森に差し込む光は浴室へと忍び込み湯槽に木の景がゆらぐ。畳一畳ほどのささやかな水辺だが、そこには雄大な開放感がある。アメリカ、カンザス州生まれ。日本の土仕事の奥深さに魅せられ大学卒業後来日。一九九一年、益子の隣町、茂木にダグラスさんは根を下ろした。器づくりだけの陶芸ではなく舞台空間でのオブジェや音楽家のための太鼓など、土による造形の可能性を果敢に探ろうとする姿勢から生みだされる作品には、彼の一環したテーマとも言える原始の胎動が焼き込まれている。

ゆるやかに流れる那珂川を見下ろす斜面に土地を借り、畑と仕事場をつくったのが七年以前、そして二年前に結婚。妻の香織さんが妊娠したのを期に本格的な家づくりが始まった。

愛娘ミゼナちゃんがすやすと眠る部屋の大きなガラス窓の向こうは、野生の梅木が満開の花を咲かせている。その部屋の真下に、「湯の小屋」は建てられた。母屋から独立した風呂場へは一度家から外へ出なければならない。多少の不便を押してでも、ここを場所に選んだのは、浴室のすぐ横を沢が流れ、水音が風呂場に心地よく響くのを想像したからだつた。

「よかつたら入つていきませんか。本当に気持ちのいいお風呂なんです」。体の調子が悪くとも家のお湯にゆっくり浸かれば治つてしまふ、香織さんは夫のつくった風呂をそう絶賛する。森に湧く聖なる泉を想わせる、グラック家の風呂の治癒力にあやかつてみたい衝動にかられ、お誘いを受けることにした。たつぶりと湯がはられた木の風呂桶からこ

ぱれ落ちる水が、洗い場に敷き詰められた石を濡らす。水に映る光の文様に見とれながら先ほど一家に導かれ散策した那珂川のすぐさまに美しい風景が蘇る。一見何気ない石だが、ダグラスさんが一年かかって、散歩の合間に拾い集めた那珂川の幸福な石たちだ。

その中で、たったひとつ金色に輝く石に目を奪われた。「ガラス作家の友だちのゴミをもらつた」という五センチほどのガラス玉が排水溝近くに埋め込まれている。一気に流れ集まる水の勢いは玉の周りで渦を巻き、美しく煌めく。風呂に入るたびに遭遇するこの小さな自然現象は、一歳半になつたばかりの幼子にどんな残像を定着させるのだろうか。

つくり手たちの風呂場には、水と戯れることを楽しむ無垢の心が宿つていて。それが何よりの居心地のよさだと思つた。

上右/那珂川までの散歩が一家の毎日の習慣だ。  
ダグラスさんの土太鼓の音が河原によく響く。  
上/木の風呂桶は  
星さんのものと同じ職人さんに依頼した。  
黒壁は同じくモルタルに松煙を混せたもの。  
天窓から降り注ぐ光が気持ちいい。  
窓の外の木々が若葉をつけ始めている。  
夏にはうっそうとした森になるだろう。  
下/1996年、東京赤坂のXSITEHILLで開かれた  
「土の音」。ダグラスさんがオブジェを作制作した。

